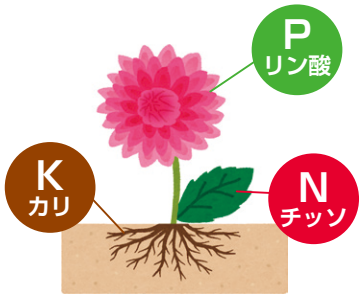
四季の営農ワンポイントアドバイス

# 肥料成分と役割をご紹介!!

園芸課
小棚木　佑亮




雪融けが進み、春本番が近づいております。
今回は肥料の成分がどのような役割をしているか紹介いたしますので農作物を育てる参考にしてください。

## 「チッソ(N)」

作物の生育と収量に最も大きくかかわる要素で特に茎葉を伸長させ葉色を濃くします。このことから「**葉肥**(はごえ)」と呼ばれます。しかし過剰に与えると、軟弱に育ち病害虫の被害にあいやすくなり、かえって減収や品質の低下を招くことになります。

実を収穫する作物は、チッソ成分が多すぎると実がつきづらくなります。

## 「リン酸(P)」

おもに開花や結実を促進する作用がある要素で、このことから「**花肥**(はなごえ)」または「**実肥**(みごえ)」と呼ばれます。リン酸が欠乏すると開花・成熟が遅延します。たい肥やリン酸の肥料を毎年多く入れている場合は、リン酸過剰になるため、注意が必要です。

## 「カリウム(K)」

カリウムは根の発育を促すため「**根肥**(ねごえ)」と呼ばれています。カリウムは土にあればあるほど吸収してしまう性質がありますが、植物の要求量は窒素ほど多くはありません。ケイ酸カリを含む肥料は、カリウムを穏やかに吸収し、長く効かせることができます。

## 「カルシウム(石灰)(Ca)」

植物の正しい細胞分裂に作用し、特に根の先端の発育に欠かせない要素です。他にも植物の細胞膜を強くし、耐病性を高める作用があります。

## 「マグネシウム(苦土)(Mg)」

光合成に必要な葉緑素を構成する要素です。植物の体内で様々な酵素を活性化させ、他の成分から栄養を作ったり、吸収を助けたりします。

上記のほかに微量要素といわれる植物の体内にはあまり多くないですが、必要とされる要素があります。鉄(Fe)、マンガン(Mn)、ホウ素(B)等がこれに含まれます。

また、化学肥料成分も大切ですが、土の物理性が良いほど、作物の生長も良くなります。繊維の多い完熟たい肥などを施用して、適度に土を柔らかくすると、根が伸びやすくなり、力強く育ちます。

## ■まとめ

肥料はたくさん入れたら良いというものではなく、作物によって吸収する量や成分が違います。適切な成分を適切な量を施肥することがおいしい野菜をたくさん収穫するための秘訣です。

また、肥料施肥につきまして相談等ございましたら、お近くの営農センターまでお問合せください。